

# 能代高

⑬

## 汽車は出てゆく

「駅長さん、次の汽車何時ですか」

たずねられた、駅長さん“目をパチクリさせて

「オレ、知らねでア」

何ともおかしな、駅長さんである。

それもそのはず、駅長さんと呼ばれたのは、実は能中の生徒だった。能中の制帽は黄線入り。ホンモノの駅長さんの帽子に似ていないこともない。そそっかしい人が、汽車通の能中の生徒を“駅長さん”と間違えた。自転車通学組は、パンク修理道具が必携だった。汽車通組も手放せないものが一つ。折りたたみ

式ちようちんである。

「冬、だば、日暮れが早えして、夜歩ぐためにカバンさへでいたし」

と菊地勝夫（1期、元二ツ井町切石小校長）。丸山五郎右工門（3期、八森町議）は、八森駅前の親せきの家に預けて、いつでも使えるようにした。

二ツ井、鹿渡（琴丘）方面からの奥羽本線組が結構多い。しかし、汽車通で最も苦労したのは、八森方面から登校した“五能線組”ではなかったか。

「早く起きれ。学校に遅れるぞ」

鈴木貞三（6期）は、父親からふとんをよくまくられた。

午前五時起床が日課だから大変だ。

学校は午前八時に始まる。これに間に合うためには、八森駅（現東八森駅）発午前五時四十分の汽車に乗らねばならない。

鈴木が乗る場所は、いつも一定。三岡編成の“マツチ箱”その最後の尾の連結器の上だった。

「危ぶねど」

家の者が何度も注意した。

「なんでもね、なんでもね」やめようとはしない。毎日陸上部できたえていて、身軽だった。

「おーい、早えく来い。汽車出ると」

駅長は、親切のかたまりだった。能中の生徒が全員乗るまで、発車を待つことはザラ。“早えく来い”と、わざわざ家まで生徒を迎えに行ったこともある。だれとだれが何時の汽車に乗り、何時の汽車で帰って来るか、駅長はすべて知っていた。

なにぶんにも朝が早いので、授業中に眠くなるのはしかたがない。

豊田金悦（2期、元八森町観

海小校長）は一度大失敗した。

「コラ、何をしとるか！」

教練の先生のどなり声でハツとしたが、すでに手遅れ。教練の時間に、銃を持ったまま眠り、うっかり地面へころがしてしまったのだ……。

「オイ、鈴木、買って来いでア」

豊田は、学校帰り鈴木に命令した。十銭でナシが三個。鈴木に一個やって、自分で二個食べた。いまごろの季節だ。

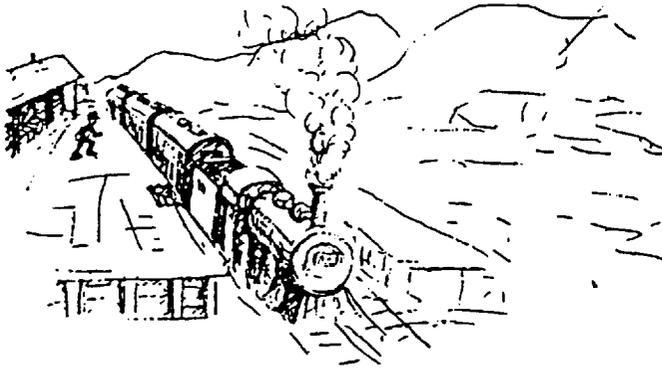
運動部の活動を終わって帰る時にはハラがベコベコ。鈴木は能代駅前の食堂でそばやしんこもちを食う習慣がついた。一日三十銭あれば足りた。が、もうじき卒業という時になって、びっくりした。食堂のつけが三十九円もたまっているではないか。八森―能代間の通学定期が、一年で二十四円のところ。まさに、汽車は出てゆく、借金は残る……。

このことで、鈴木は、母に頭  
があがらなくなつた。父に内緒  
で借金を清算してくれたのが、  
愛する母であつた……。

鈴木は、八森町長三期目とし

て活躍中の六月四日、突然病氣  
で倒れ、帰らぬ人となつた。中  
学時代の思い出をいかにも楽し  
そうに記者に語ってくれたその  
翌朝……。

(敬称略)



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

## 能代高

⑭

### はるかなオガ

甘く、すっぱいのが、初恋の  
味”。甘く、のどがバカにかわ  
いたのは、熊谷忠一（5期、能  
代高教頭）らの“無銭旅行”の  
思い出。

四十年余昔の男鹿半島といえ  
ば“秘境”そのものというイメ  
ージ。能代からそんなに遠くな  
く、足がたよりの“無銭旅行”に  
挑戦する中学生が、年に何人か  
ずついた。

「あとこれが最後の夏休み。  
一生の思い出に、すんばらし旅  
行をさねか」

熊谷が誘った。

「行くべし、行くべし」

同級生の本庄秀蔵（前能代市

立商高図書館長）渡辺竜夫（青  
果組合役員、仙台）の二人も即  
座にOKした。昭和八年夏のこ  
とである。

熊谷は柔道部。本庄はバレー  
部。渡辺は野球部。所属する運  
動部は三様だが、一番気のある  
仲間だった。熊谷の場合、柔道  
をやるかたわら、バレー部にも  
顔を出した。腕は確かで、本庄  
とともに県大会に行つて活躍し  
たものだ。

「行くなら、家来を連れて行  
ぐべし。家来は、なんぼでもいる」  
渡辺が大きく胸を張った。そ  
ういえば、野球部には下級生が  
ずいぶん多い。よりどり、みど  
りの感。結局、相沢東一（7期、  
安田生命）ら三人が“家来”の  
役目をおおせつかった。

さて、五年生三人、三年生三  
人の一行六人は、足どりも軽く  
（これは最初のうちだけだった）

はるかなる男鹿めざして元気に出発した。

しもふりの夏服姿がよく似あう。各自のリュックには、米二升五合、みそ、しょうゆ、かん詰、蚊取線香等。演習用の TENT を学校から借り出し、リュックとともにかついだ。

所持金は一人二、三円。無銭旅行にしては大金。それでも、もつと持つてゆくべきだった。金がないために、せつかくのチヤンスを逃す結果になったのだから。

一日目。能代を出て日暮れに八郎瀉着。瀉のほとりに佃煮工場があつて、ここで高価なおかずが手に入った。

佃煮のできるまで、を見学していたら、親切にも

「ほら、ちよつとやつか…」

水アメをたつぷり使ったおいしい佃煮。甘い思い出というの

がこのことである。

翌日は、甘くなかった。

海岸に沿つて北浦へ。そこから内陸を戸賀に向かった。行けども行けども目的地に着かない。日も暮れた。

「なんぼなんだつて、変だな。道間違えたかな？」

熊谷は心細くなった。

「いや、地図間違つてるんでねがな」

渡辺は、家来の手前もあつてか、なかなか強気。夜八時過ぎにようやく戸賀湾あたり。どこにテントを張つていいか見当もつかず、日にとまつた小学校へ行つてみた。

「今夜、教室さ泊めてけねすか」

すると、当直の先生

「やじゃね。二、三日前どこ

かの中学生泊めたら、ていっぺえ汚されで、こりしてしまった。すぐそこ浜辺だから、天幕張つ

たらどだ」

翌朝起きてみんなびっくり。浜辺だとばかり思つてテントを張つたところは、まだその学校の校庭だった。

三日目。海岸のがけづたいにハラハラしながら樁へ。明るいうちに樁着。カフェに入つてく

つろいだ。学校ではカフェに行くことを禁じていた。

「晚げ、まだ遊びに来えばいいねすか」

女給さんにウインクされたのは、六人ともその時が初めて。

「んだすか、いいあんべにたのむすて」

一同そう答えた。が、金が十分なくて、涙をのんだ……。

最後の日。船川へたどりついた。ここからは能代まで汽車。

切符を買つたら、残りの金では昼めしを食べることもできず、駅前で氷水をやつと一ぱい。か

わいたのどに、うまかった。

こうした男鹿めぐりは、熊谷より後輩の長岡祥夫（7期、能代檜山財産区委員長）らも体験、寒風山登山などが楽しい思い出になつてゐる。

熊谷は気分がいい時、こんな歌を歌いたくなる。

「夏が来れば思い出す はるかなオガ 青い海……」

（敬称略）

